

【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和6年度学校評価 結果・学校関係者評価

達成度（評価）	
A	十分達成できている
B	おおむね達成できている
C	やや不十分である
D	不十分である

1 前年度 評価結果の概要	全体指標「自分には、よいところがあると思う」と回答した児童が76%と目標値には至らなかったが、「先生はあなたのよいところをほめてくれる」については、前年度よりも伸びた。引き続き、児童の自己肯定感や自己有用感を高めるような取組を実施していく。教育活動推進のための3つの重点については、どの項目についても85%以上の成果を上げることができた。今後は、数値が伸びてきてはいるが、学習の振り返りをさらに充実させていくことや教職員の業務改善について職員から意見を集約しながら、できることから進めていく。
2 学校教育目標	やさしく かしく たくましく 笑顔の花咲く 桜っ子の育成 ～すべては子ども達の笑顔のために～
3 本年度の重点目標	一人一人の教職員が、学校教育目標の実現に向けての意識を高く持ち、児童の「自己有用感」を高める取組を推進する。 《教育活動推進のための3つの重点》①子どもが自ら学びたいとなる授業作り、生徒指導の充実 ②子どもの困り感に寄り添う支援、心と体を育てる教育活動の充実 ③教職員の協働意識・体制の向上（認め合い・支え合う職員集団）

4 重点取組内容・成果指標				5 最終評価	
(1) 共通評価項目				最終評価	
評価項目	重点取組	成果指標（数値目標）	具体的取組	達成度（評価）	実施結果
●学力の向上	○校内研究を軸とした主体的・対話的で深い学び	○「桜岡スタイルでの授業の実践や、児童について力を常に振り返る等、授業改善に努めた。」と回答した教職員が80%以上 →学校評価教職員アンケート ○学習の終わりに、『学習の振り返りができている』と回答した児童80%以上 →学校評価児童アンケート	○すべての授業で、「めあて」「見通し」「考えよう」「まとめ・振り返り」を意識して「桜岡スタイル」での授業の実践に取り組む。 ○学習の終わりに、振り返りの視点を示し、学んだことを自分の言葉で振り返らせる。 ○各学年で指導案検討を行うことで、授業力を向上させるよう取り組む。	A	・教職員アンケートの結果では、88%の職員が「達成できている・概ね達成できている」と回答しており、目標値を大きく上回った。 ・児童アンケートの「ふりかえり」に関する項目では、どの学年においても80%以上が肯定的な回答をした。しかし、次につながるふりかえりを書くことができない児童については、80%に満たない学年が多かった。
	○児童の基本的な学習習慣の育成	○『立腰』と『か・つ・お』を共に守れた」と回答した児童80%以上	○学習規律定着のために「立腰」を合い言葉に学習の構えをつくる。 ○「か・つ・お」を合言葉に、学習の準備を行い、速やかに学習に取り組むことができるようにする。	A	・学校評価児童アンケートでは、91.5%の児童が、『立腰』と『か・つ・お』を守れた」と回答しており、児童の学習に臨む姿勢を意識づけられたことができた。 ・立腰の仕方と「か・つ・お」の合言葉については、次年度も継続していくために、再度統一して確認していく必要がある。
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○「自分にはよいところがある」と答えることのできる児童80%以上。	○「心を考える日」に人権教室を3回、人権集会1回を実施することにより、人権週間の充実を図る。 ○道徳教育やいのちの学習を通して、自他の生命を尊重する心を育てる。	A	・3回の人権教室と2回いのちの学習、人権週間に合わせた、講師招聘による人権集会や全校人権講話等を年間計画に沿って取り組むことができた。 ・「自分にはよいところがある」と答えた児童は、ほぼ目標の80%を達成している。自己肯定感を高めるための声かけを引き続き行って成果と考える。 ・今後も学習に合わせた基本の読みかせや人権学習を通じて、いのちや人権について考える機会を設定し、自己肯定感の向上に努める。
	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	○学校評価アンケートの保護者のいじめの対応についての評価を90%以上にする。	・いじめアンケートやすっきりここにアンケート等を通して児童の状況を把握し、問題のある事象に対して聞き取り等を行うことで、いじめの未然防止、早期発見、早期対応に努める。	B	・学校評価の保護者アンケートで、「いじめの早期発見、早期対応ができている」の項目で、83パーセントが肯定的な回答をしているという回答で、昨年と同様だった。 ・いじめについての研修も計画通り行った。
	●児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動。	●「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童生徒80%以上 ●「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童生徒80%以上	○「生徒指導の3機能」を意識し、自分で考え、選択し、決定したことを伝え合い認め合う授業・活動を実施する。 ○学校生活における教職員からの声かけや、桜カードでの保護者や地域の方からのメッセージを通して、自分や友達を多面的・肯定的にとらえる機会を作る。 ○地域の方との交流、体験活動、学校行事等でキャリアパスポートを活用し、活動に対する目標や振り返りを計画的に設定する。	A	・学校評価アンケートの結果より、「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童は83%であった。学校行事や委員会活動、児童会活動を通して、活躍の場を設けたことで児童の自己有用感が高まった。 ・学校評価アンケートの結果より、「将来の夢や目標をもっている」について肯定的な回答をしている児童は88%であった。外部講師を交えての体験学習や学校行事などを経験し、振り返ることで児童が自分の夢や目標をもつことができた。
●健康・体づくり	●「運動習慣の改善や定着化」	●授業以外で運動やスポーツを行う時間が1週間で420分以上の児童生徒65%以上	○共遊(学級・学年間交流)の時間を計画的に実施し、外で遊ぶ楽しさを実感させる。 ○自力登下校や休み時間に遊ぶことを促すような声をかけ、体を動かす習慣化を意識させる。	A	・授業以外で運動やスポーツ、外遊びを行う時間が、平均して1日あたり60分を超える児童が80%であった。また、「Let's運動・外遊び週間」の設定や運動委員会の外遊びのイベントを開催することができた。
	●「安全に関する資質・能力の育成」	●児童生徒の交通事故を0(ゼロ)にする。 ○避難訓練や安全教室等を計画的に実施し、登校している全児童と全職員が避難訓練や安全教室等に参加する。 ○食物アレルギーを有する児童の誤食等の事故や、食に関する事故発生を0(ゼロ)にする。	○交通安全教室を実施し、正しい道路通行と自転車運転について体験させたり、講話視聴をさせたりする。 ○長期休業前は、自転車運転時のヘルメット着用を呼びかける。 ○水難時引き渡し訓練と不審者避難訓練と火災避難訓練をそれぞれ年間1回以上実施する。 ○AEDやエドペン等の職員研修を行い、危機管理に対する共通理解を図る。	B	・児童生徒の交通事故を0(ゼロ)にできた。 ・避難訓練や安全教室等を計画的に実施し、登校している全児童と全職員が避難訓練や安全教室等に参加した。 ・食物アレルギーを有する児童の誤食等の事故や、食に関する事故発生を0(ゼロ)にできた。 ・自転車のヘルメット着用率が1.9%と帰宅後の防犯ブザー携帯率が11.8%と低く、児童への安全意識を向上させる必要がある。
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。	・毎週金曜日を退勤促進日に設定し、17時30分までの退勤とする。併せて月曜日から木曜日までを19時までの退勤とする。 ・年間において月平均時間外在校時間45時間以内の職員を80%以上とする。 ・全職員で業務改善案を検討し、ホムアップ方式での取り組みを推進していく。	B	・職員一人あたりの月平均時間外在校時間は、前年度とほぼ同程度であった。アンケートで、85%の職員が取組について達成できたと回答している。しかし、市内の小中学校平均値と比べると、超過勤務時間がまだ2.7時間多い状況である。引き続き職員からの意見を集約しながら、業務改善に取り組んでいく。
●特別支援教育の充実	○特別支援教育に対する教職員の知識・理解の更新、向上	○見守りたい子の情報共有を児童の支援に生かされた」と回答した教員が90%以上 ○多様な学びの場を保障できたと回答した教員が80%以上	○特別支援教育の研修を講師を招聘して行い、教員の専門性を高める。 ○特別支援学級を学年グループに配置し、学年の連携を図る。 ○年度初めに特別支援教育に関わる教室の環境を整える。 ○校内支援委員会を通して、多様な学びの場を提供し、個に応じた支援をする。	A	・困り感のある児童のサポートや、行事や学習活動の連携など担任と特支担任が協力し合って学年団をまとめていくことができた。特支担任が学年の人権教室で特支学級について話したり、授業を行ったりするなど人権や平和への意識を高めていくことができた。 ・「見守りたい子の情報共有を児童の支援に生かされた」と回答した教職員は97%、「個に応じた支援や多様な学びの場を保障している」と回答した教員が100%で、教師の意識の高まりが感じられる。研修会や拡大支援委員会、ケース会議などで学びを深めている教師が増えている。

(2) 本年度重点的に取り組む独自評価項目				最終評価	
評価項目	重点取組内容	成果指標（数値目標）	具体的取組	達成度（評価）	実施結果
教育相談体制の構築	○悩みを抱える児童の困り感を共有し、対応できる体制の構築	○「心配なことや困っていることを相談した」と回答した児童のなかで、先生に相談した児童が70%以上 ○「保護者や児童にとって、困っていることを相談しやすい環境をつくられた」と回答した教員が80%以上	○覚知した児童の状況について管理職や教育相談担当、担任等と情報共有を行う体制の整備、構築。 ・(年3回) すっきりここにアンケートの実施。 ・「見守りたい子」の共有。 ・SC、SSW、SSF、支援センター等との連携。 ・困り感をもつ児童が安心して過ごすことができる居場所づくり。	B	・不登校や不登校傾向の児童に対して、校内支援室やその運用、その他の居場所づくりについて、全職員で話し合い、協力して取り組むことができた。その結果、不登校児童または不登校傾向児童の大半が、別室登校や時間外登校などいろいろな登校パターンで学校に通うことができた。「多様な学びの場を提供できた」と回答する職員は100%だった。 ・「困ったときに先生に話す」児童が約60%で課題があり、定期的な児童用アンケートや担任への調査によって、不安をもつ児童について全職員で情報を共有し、素早い対応を心掛けた。職員間の相談しやすい雰囲気は92%、保護者は81%であった。

●...県共通 ○...学校独自 ◎...志を高める教育

5 総合評価・ 次年度への展望	教育活動推進のための3つの重点の①については、「授業がわかる」と回答した児童が90%を超え、「桜岡スタイル」での授業実践を達成できた教職員が85%を超えている。また、学校のいじめに対する取組については保護者から93%と肯定的な評価をいただいた。②については、人権集会、いのちの学習、人権教室などの人権学習を計画的に取り組むことができた。児童アンケートの「自分にはよいところがある」と回答した児童も80%を超えた。③については、あらゆる教育活動において教職員が支え合いながら教育実践に取り組むことができた。ストレスチェックでは同僚性が高い職場であることがわかり、このことがすべての実践の基盤となっている。今後も本校の教職員集団としての良さや教職員一人一人の強みを生かしながら、課題解決に向けて取組を進めていく。
--------------------	--